

#### 4. 独立

### 会社のカラーから脱して自分のカラーで勝負したい

1968年7月、小野穎子氏は丸三タオルを退社し、翌月の8月にテキスタイルデザイン女性工房「アトリエ<sup>チ</sup>CHU<sup>チ</sup>CHU」を立ち上げた。退社の理由は、会社のカラーから脱して自分のカラーで勝負したい、という気持ちからだった。

通常、タオルのデザインには会社の独自性というものがあり、自社的なデザインにそぐわない場合、どんなに面白いデザインでも却下された。鳥の絵を描きたいのに、鳥の絵で売れた実績がその会社にないと鳥は採用されない。丸三タオルは小野氏にとって比較的自由に冒険をもさせてもらった居心地の良い場所であったが、「自由に描いた作品のなかから気に入った物を選んで買ってもらいたい。そのためには独立しかない」と思い、いったんそう思ったら一目散にその方向へ走っていた。もちろん、会社にも相談し、また高階先生や先輩たち、友人などにも意見を請うたが、小野氏の心はすでに決まっていた。独立後の名前も決まっていた。

小野氏は、海善寺通りから少し入った小さな2階建てのアパートの2階を借り、「アトリエ CHUCHU」の看板を掲げ、新たなスタートを切った。CHUCHUとは、フランス語で「元」の意味である。東京で生活していた頃、カタカナでチュチュという名前の下着店が銀座にあり、ずっと頭に残っていた。まさか独立して自分の会社の名前に付けるとは、そのとき夢にもおもわなかった。

小さなアパートの2階の事務所は、仕事の環境に適していた。事務所の窓を開けるとベランダから遠方に四国山地がみえ、眼下に常盤小学校の校庭があった。学校の休み時間になると子供たちの賑やかな声が聞こえ、時計がなくても時間がわかった。そんな環境で、小野氏は弟の信氏の同級生であった安原淳子氏を従業員に雇って二人でデザインの仕事をこなしていった。

アトリエ CHUCHU のおもな仕事は、タオルのデザインだった。待っていても仕事は来ないので、描いた作品をもって直接タオル・メーカーを自転車で回り営業活動をおこなった。10点ほど作品ができたならこまめに営業して回る。この繰り返しだった。独立して間もない頃は、取引先との駆け引きで無理難題を押し付けられたり、夜逃げされて集金ができなかったり、何度も独立しなければ良かったとふと思うこともあったが、そのうち営業の話術や相手の意向を汲むノウハウを身に付け、丸三タオル時代から取引のあったところを中心に、安定して商売をつづけることができた。

独立後はとくにバスタオルのデザインが多かった。バスタオルは実寸（60cm×120cm）で描いていたのでたいへん時間を要したが、サイズが大きかったため売上に貢献した。バスタオルのつぎにセットものも多くデザインした。古楽の丸三タオルにはおもに贈答用フェイスタオルのデザインを請け負った。

今治タオルが得意としたタオルケットは、バスタオルやフェイスタオルに比べると請負数は少なかったが、ある時期まで依頼があれば引き受けた。タオルケットの場合、ジャカード併用プリント（ジャカプリ）が主流であり、製織されたタオルケットにプリントを施すので手間と技術を要した。仕上がったタオルケットを広げて型をとり、つぎにトレーシングペーパーを全体に敷いて再び型をとる。つぎに、紙に写してコンプレッサーでデザインした絵や柄をプリントしていく。製織のクオリティが高くなければ、トレーシングペーパーを敷いたときに型がずれてうまくいかない。ある時期、というのは、タオル・メーカーが中国に生産拠点を持つようになった時期を指しており、中国産のタオルケットはクオリティが低く、いざコンプレッサーでプリントする段階で型が合わず、自分が描いたデザインにもかかわらず、切ったり貼ったり描き足したりして型を合わしながらプリントしていく。この過程はかなりの作業を要したため、中国産が多くなった1990年以降はタオルケットのデザインは止めてしまった。

タオルのデザインのほかに、1970年から1年契約で香川県丸亀市の靴下問屋からの依頼で靴下のワンポイントのデザインも手がけた。月1回のペースで丸亀に出かけ、描いた作品を持って行った。犬のダックスフンドやガイコツの足などをモチーフにデザインし、タオルとは違った面白さがそこにはあった。

デザインの仕事は本業なのでたいへんな作業も要領良くこなしていったが、経営者の立場から神経を使ったのがお金のやり繰りだった。従業員を抱えていたので、毎月15日の売上計算のたびに、「今月は給料が払える。ボーナスの分もある」といった具合にお金の計算は頭から離れなかった。締め日の近くに営業から事務所に帰ってくると、「先生、怖い顔してる」と従業員にしばしば言われたほど、お金のマネジメントにはつねに注意を払った。

私生活では、小野氏は、独立しておよそ1年半が過ぎた27歳のときに小野<sup>しげし</sup>滋二氏と結婚した。出会いは丸三タオルである。武蔵野美術大学出身の滋二氏は小野氏より2歳年下で、小野氏が独立する1年前に丸三タオルに入社した。デザイン室で阿部真三氏を含めて3人で一緒に仕事をした仲である。

結婚後、二人の男の子を授かった。長男の創太郎氏は1972年5月生まれで、小野氏が29歳のときの子供である。次男の<sup>だいすけ</sup>大介氏は1974年2月生まれで年子になる。その後、小野氏は事務所を城山通りに移転した。そしてその4年後の1978年に、滋二氏の実家で現在のギャラリーCHUCHUがある旭町に移転し、自宅兼事務所として滋二氏の両親と一緒に生活を始めた。滋二氏が事務所の代表を務め、小野氏は補助に回り、2人でデザイン事務所を切り盛りした。しかし、悲しみは突如

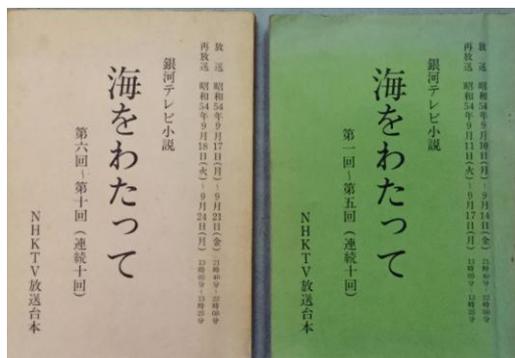


滋二氏と嵐山にて

としてやってきた。1980年、まだまだ働き盛りだった滋二氏が病気でこの世を去ったのである。突然の出来事だった。結婚してちょうど10年、残された小野氏は、アシスタントを2人雇い、それまで以上に懸命に働いた。2人の子供たちが「何時に寝ているの？」というくらい一生懸命に働き、仕事中心の生活を送った。

小野氏は、「おじいちゃん、おばあちゃん、とってもいい人で、主人が残してくれた」と言う。二人の子供を抱えながら仕事をつづけられたのは、義父と義母のおかげであった。「義父は買い物部長で、義母はコック長、わたしは総務部長で」子供たちを協力して育てた。義父は、毎日広告をチェックして、安い卵を見つけてはスーパーをハシゴしたり、1人1袋限定の砂糖を3回くらい列に並んで3つ手に入れたりしていた。義母は、NHKの料理番組を見ながらうまく工夫して美味しいごはんをいつもつくってくれた。こんなふうに義父と義母に助けられながら、子育てと仕事を両立した。

独立後の小野氏の活躍は、のちにNHK銀河テレビ小説の「海をわたって」で世に知られることになる。同テレビ小説の主人公のひとりには小野氏がモデルとなった物語であり、松山千春の「夜明け」を主題歌に今治でタオルのデザインに情熱を燃やす若者たちの姿が描かれた。劇中に登場するタヌキをモチーフにしたタオル・セットは、ハンドタオル、フェイスタオル、バスタオルのサイズ違いのタオルにタヌキの家族を描いたもので、小野氏の発案である。



NHK 銀河テレビ小説の  
「海をわたって」の台本

## デザイナーを目指す若者の指導に貢献したい

小野氏は、1990年11月に職業訓練指導員の免許を取得し、1991年4月から2009年3月まで愛媛県立今治高等技術専門校デザイン科の非常勤講師を務めた。同校のデザイン科は、泉工芸の田窪芳郎氏と諏訪紋匠社長で今治デザイナーズクラブ会長だった諏訪弘一氏が、将来のデザイナーを地元で養成するためにつくったコースであった。指導の道に入ったのは田窪氏から協力を依頼されたのがきっかけだが、小野氏のなかでも地場産業でデザイナーとして職業転換を希望している若者の指導に貢献したいという気持ちがあった。

本業の仕事をしながら学校で教えていたため最初は週に1回のペースが限度だったが、そのうち回数も増えていき、振り返れば18年間若いデザイナーの卵たちの指導に当たっていた。指導内容は、手で描く素案づくりを中心に、自分で<sup>いち</sup>からつくり上げる大切さを教えた。小野氏の退職後はコンピュータの時代に移行していくが、在職中は小野氏みずからの経験を生かしてデザイン化していく作業を徹底して生徒たちに伝授していった。頭で考えたものを構成し、それを壊し、さらに構成し直してデザインに仕上げていく。生徒たちから校長先生だと間違えられるくらい厳しく威風堂々としており、真っ向から生徒たちと向き合った。

その甲斐あって、教え子のなかにはコンテックス(株)や楠橋紋織物(株)、(株)藤高など地元のタオル・メーカーに就職し、実際にデザイナーになって巣立っていった生徒も数多くいる。



愛媛県立今治高等技術専門校にて生徒たちと

（1998年撮影）



専門校のデザイン展で生徒たちと

前列右の宮田麻子氏は今治の

ゆるキャラ・ハリィさんの発案者

デザイン科での指導は定年を迎えた2009年3月で終了し、同時に38年間つづけてきたタオル・デザインの仕事に幕を閉じ、小野氏の長年の夢だったギャラリーを開設した。2009年4月からアトリエCHUCHUをギャラリーCHUCHUに変え、8月には改装工事に入り、2010年1月にオープンに漕ぎ着けた。専門校での仕事が忙しくなる一方で、タオル業界の低迷を反映してタオル・デザインの仕事が徐々に少なくなっていたことが第一線から退いた理由でもある。

小野氏は、県外で活躍している地元出身のアーティストなどの作品を集めて“芸術で地域をつなぐ”ことを目的に、絵を鑑賞してもらう本格的なギャラリーを目指した。このような試みは今治では珍しく、発足当時、愛媛新聞（2010年1月19日）と読売新聞（2010年1月21日）にとり上げられた。女子美大を卒業したあとも高階重紀先生のもとで油絵を描いたり、アトリエ時代にも東京の銀座で個展を開いたり、絵を描くことはライフワークだったので、ギャラリー開設は小野氏の人生にとって昔からの夢であり、そして帰着点

でもあった。現在、ギャラリーは展覧会や教室として利用され、教え子たちが集う毎日である。（次号につづく）

